

唐和辞書収録語彙の一側面：
『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を
通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩本, 真理 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006178

Title	唐和辞書収録語彙の一側面：『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて
Author	岩本, 真理
Citation	人文研究. 55 巻 4 号, p.21-45.
Issue Date	2004-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

唐話辞書収録語彙の一側面

—『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて—

岩 本 真 理

1 はじめに

本稿は唐話辞書の編纂方針の違いが、収録語彙の特徴に反映されていることを実証的に明らかにすることを目的とする。具体的な方法としては、「見出し語」をその語構成により分析し、該当資料内での分布状況を手がかりとして、編纂者の意図を解明する。

比較する資料は次の2種である。

A『唐話纂要』(増補版) 岡嶋冠山 享保3(1718)年6巻本 「唐話辞書類集」巻6所収(汲古書院)

B『南山俗語考』島津重豪 文化9(1812)年6巻本 鹿児島大学図書館玉里文庫所蔵(6巻末尾に「和訳 曾槃 華音 石塚崔高」とあり)

基本的にはこの2種の資料の比較により考察を加えるが、4章では『南山俗語考』の稿本と目される『南山考講記』との比較をおこなう。使用する資料は自跋に明和丁亥とある長沢本である¹⁾。

C『南山考講記』島津重豪 明和4(1768)8巻 写本 長澤規矩也旧蔵 「唐話辞書類集」巻5所収(汲古書院)

具体的な検証に入る前に、まず、「唐話」という語で指し示される内容が一樣なものではなく、多様な性格をもつことを確認しておく。奥村(2001)は「唐話」を、次の3類に分けて論じることが妥当であるとする。

- 1 唐通事によって継承されていった言葉
- 2 唐話学者により紹介された言葉
- 3 唐通事以外の知識人による作文

筆者は、これを受けて、唐話資料を以下の3系列からなるとみなす。

- ① 唐通事養成のための教本の直系とみられる資料群²⁾
- ② 唐話学者編纂による辞書類などの出版物
- ③ 漢学者など唐話学者以外による著作物³⁾

1、2、3は①、②、③にほぼ対応すると考えるが、言語的特徴の差異や重なり、影響関係などの解明が待たれるところである。

さらに、もう一系列を加えるとすれば、明治以降における唐話学継承を示す辞書類が挙げられよう⁴⁾。

本稿で検証の対象とするA・B2資料のうち、『唐話纂要』はいうまでもなく、②の代表的な著作である。唐話資料の筆頭に挙げられる資料でありながら、従来の研究には欠落していた言語的特徴の解明に取り組んだ成果として奥村(1996)、(1997)、(2001)などの一連の論考がある⁵⁾。ことに奥村(2001)は、文法上の働きが顕著である語彙を抽出し品詞別に記述した点で評価できる。しかしながら、文法上の働きという点では劣るものの実義性の強い広範な語彙群には分析が及んでおらず、語彙全般の特徴の把握はなお課題として残されている。

一方『唐話纂要』の比較対象である『南山俗語考』は、その編纂の功績を島津重豪一人に帰するよりは、薩摩藩の永年にわたる唐通事養成の蓄積が集約されたものとするのが妥当であろう。薩摩藩の唐通事養成が長崎唐話学からの影響下にあったことは石崎(1926) pp.56-59の記述から明らかで、通事養成用の教本類の名称が長崎で使用されたものと一致するものが少なくないという記述や、長崎留学により一層の研鑽を積んだ通事であったとの記述もその証左となろう⁶⁾。

また『南山俗語考』の収録語彙中に長崎唐話学の直接的な影響を示唆するものがある。以下に例を挙げる。

巻1 地理名称類12葉裏に「東洋：日本」、「江戸：エド」、「大坂：オホサカ」に続けて「長崎：ナガサキ」「飛鷹島：ヒラド」と列挙する。

巻3 宝貨器用服飾香奩玩具類26葉裏に「司馬：フスマナリ○長崎渡来ノ唐人和語ヲマ子テ云コトバナリ」とあり、同様に27葉表に「踏踏面：タ、ミ」「套馬：トマ」を収録する。

日本固有の語彙が唐人には音訳の方法で理解されていたことを示す例でもある⁷⁾。

『南山俗語考』は①の唐通事養成の教本の直系とはいいがたい。『唐話纂要』と同じく、②の唐話学者編纂による辞書類の系譜に属するものと筆者は考える。次章でこの2資料が収録する語彙の具体的検討に入る。

2 「見出し語」についての検討

唐話資料②の系列、すなわち唐話学者の編纂した辞書類などは、配列方式からさらに数種に区分することが可能である。

- a 語句の文字数毎に配列する。
- b 語句の親文字の筆画順に配列する。
- c 語句の和訳のいろは順に配列する。
- d 語句を分野別の項目により配列する。
- e 会話や問答体で、語句の配列への配慮はなされない。

f 白話小説などの読解のための注釈書で、本文の要注釈箇所の出現順に配列される。

このうち e、f は辞書という体裁からはかなり遠いが、唐話学者編纂による辞書の典型とされる『唐話纂要』には、a、d、e の3方式が混在しており、純粹の辞書ではなく、会話書の体裁をみせている。また巻6には読解訓練用と思われる長文が付され、注釈は欠くものの f に近い様相を呈している（『唐話纂要』全6巻の構成は次節2. 1の[表1]を参照されたい）。a～fのいずれの方式を採用するかは、編纂者が読者としてどういうレベルの者を想定していたか、あるいはどのような学習目的をもつ者を対象として構想していたかによって決定されよう。なお、『唐話纂要』の巻1～3はaの方式で配列しているが、文字数毎に区分した後、意味の近似する語句や関連する語句を数個ずつまとめた配列となっている。

一方、『南山俗語考』はdの方式で一貫しており、巻6付録の「長短雑話」のみeの方式をとる。

さて、上記のa～eで「語句」という用語を用いたが、狭い意味での「単語」に限定されるものではなく、「フレーズ」（時には「文」「複文」）をも含む広い範疇を指し、以下の記述では「見出し語」とよぶことにする⁸⁾。

2. 1 『唐話纂要』の見出し語の傾向

『唐話纂要』の「見出し語」がどのような成分から構成されるかに着目してその出現数を巻・項目に分けて示したものが、[表1-1]、[表1-2]、[表1-3]である。「見出し語」の判断が下しがたい「常言」（格言）、「長短話」（会話）、「数目」、「小曲」、「和漢奇談」は今回の調査の対象とはしていない。

表中、名詞、動詞、形容詞の各欄は、それぞれ名詞フレーズ、動詞フレーズ、形容詞フレーズをも含んでいる。先に述べたように、「見出し語」には「単語」に限らず「フレーズ」あるいはそれ以上の単位も含み、「単語」についての品詞認定に加えて、「フレーズ」を各タイプに分けたうえでの出現数算出となっている。例えば、「血槽的刀」（巻5 器用 p.196）は名詞フレーズとし、名詞の出現数と合算する。また、疑問詞は名詞に含ませ、名詞・動詞が同形の場合は、和訳に従っていずれかに帰属させたいうえで、出現数を計算した（2. 2の[表2]、[表3]、[表4]も同様の扱いをしている）。

[表1-1] 『唐話纂要』見出し語の字数別・内部構成別一覧（巻1～巻4）

	巻1		巻2	巻3			巻4
	二字話	三字話	四字話	五字話	六字話	常言	長短話
名詞	162	31	70	4	2	対象外	対象外
動詞	416	378	502	73	67		
形容詞	155	40		11	3		
副詞	21	7	34				

文	5	20	108	30	46		
接続詞	6						

[表1-2] 『唐話纂要』見出し語の字数別・内部構成別一覧（巻5）

	巻5							
	親族	器用	畜獣	蟲介	禽鳥	龍魚	米穀	菜蔬
1字 名詞								
2字 名詞	96	425	46	110	82	83	40	69
3字 名詞	6	4	2			2		1
4字 名詞	6	1						
5字 名詞		2						

[表1-3] 『唐話纂要』見出し語の字数別・内部構成別一覧（巻5・巻6）

	巻5							巻6
	果蔬	樹竹	花艸	船具	数目	小曲	正頭	和漢奇談
1字 名詞					対象外	対象外	1	対象外
2字 名詞	44	67	95	75			26	
3字 名詞	3		5	12			9	
4字 名詞							1	
5字 名詞								

この表から、巻1～3の字数別配列部分は、「○字話」の字数の増加にともない、名詞・名詞フレーズの比率が下がり、動詞・動詞フレーズや文の占める率が上がっていることは明らかである。この表には反映されていないが、字数の増加につれて、単独の動詞の出現は減り、より複雑な動詞フレーズが見出し語となることを付言しておく。この点は3章で、『南山俗語考』の動詞フレーズの出現状況と比較しながら検討を加える。なお、この表の「文」には、動詞述語文だけでなく形容詞述語文なども含むがここでは区別をおこなわない。

一方、巻5の部門別分類では、名詞・名詞フレーズに限定されており、なかでも2字の単語（名詞）が、圧倒的優勢を占めていることを指摘しておく。

神林(1997) p.99は『唐話纂要』が「一字話」の章を設けないことを、会話力の養成に重点を置いた結果であるとする。「了」や「得」などに、用法の解説を一字ずつ加えるよりも動詞と結合したフレーズで提示する方法が有益とみなされたとの解釈であり、本稿筆者もこの見解に同意す

唐話辞書収録語彙の一側面－『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて－

る。蘭語学とは異なり、文法研究へと向かうことの少なかった唐話学の特徴でもあり限界でもあろう。

2. 2 『南山俗語考』の見出し語の傾向

『南山俗語考』の見出し語の字数別に、出現語数を示したものが[表2]である。表中の横軸に挙げる「天文」、「地理」などは部門分けの名称を略したものである⁹⁾。巻6の附録「長短雑話」は調査対象外とする。

[表2-1] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧（巻1）

	巻1						
	天文	地理	人品	身体	親族	性情	動作
1字		6	1	12			
2字	168	89	145	117	103	8	1
3字	164	69	233	154	30	106	177
4字	10	2	14	6	9	2	5
5字	6		2	1	2		2
6字	5	2	4	3		1	10
7字	1			1			2
8字		1		2			
9字			1	1			
10字	1						
11字							
12字	1						

[表2-2] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧（巻2）

	巻2							
	賓友	通用	干求	患難	疎慢	徳芸	盟約	遊眺
1字								
2字	7	26	3		1	2		
3字	435	370	121	21	38	85	30	6
4字	22	23	3	3	1	2	4	1
5字	1	1				1	3	
6字	12	5	3	1				

7字	1	2					1	
8字		1						
9字	1	1			1		1	
10字								
11字								
12字								

[表2-3] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧（巻3）

	巻3							
	筵宴	祭祀	慶弔	寄贈	婚姻	官府	器用	読書
1字							6	
2字	16	2	3	4	25	5	563	6
3字	274	50	102	43	11	173	163	290
4字	28	2	12	6	7	3	3	9
5字	3		2	1			1	2
6字	12	4	2	1		10	2	13
7字	1	2		1				2
8字	2	1						1
9字	3	1			1			
10字	2			1				1
11字						2		
12字				1				

[表2-4] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧（巻4）

	巻4								
	製作	数量	諸物	財産	兵法	疾病	医療	船件	居室
1字						2	2	3	4
2字	3	2		4	89	200	15	211	124
3字	331	241	112	165	33	124	54	91	103
4字	3	3	2	2	5	10	2	6	1
5字						1		3	

唐話辞書収録語彙の一側面－『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて－

6字	3		2	4	2		7	3	3
7字							1		
8字					1	2			2
9字							1		1
10字	1								
11字									
12字							1		

[表2-5] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧(巻5)

	巻5								
	菜蔬	飯肉	煮煎	魚鼈	蟲類	畜獸	禽類	樹竹	花卉
1字	2	19		2			6		
2字	109	152	4	103	51	54	96	54	54
3字	57	92	52	30	13	7	23	16	94
4字	3		2		1		1		1
5字			1						
6字	3		3						
7字									
8字									
9字		1	1						
10字	1								
11字									
12字									

[表2-6] 『南山俗語考』見出し語の字数別一覧(巻5)

	巻5			
	菜蔬	種芸	衣服	馬鞍
1字			10	5
2字	45		89	48
3字	17	34	119	17
4字			3	2

この表から、見出し語の字数へのこだわりがなく、最小限の1字から、異様に長い12字のものまでを含むことがわかる。全般的な傾向として、巻1～巻4では、3字の見出し語の出現比率が非常に高いことが窺える。一方、巻2の「器用」類と巻5では2字の見出し語が優勢を占めていることが目を引く。

次に、[表3]により、見出し語の構成方法の違いとその分布状況をみよう。表中の「文」は単文、複文の両方を含み、「介詞」は「介詞フレーズ」を指す。

[表3-1] 『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧(巻1)

		巻1						
		天文	地理	人品	身体	親族	性情	動作
1字	名詞		6	1	12			
	動詞							
	形容詞							
2字	名詞	111	82	145	114	103	6	
	動詞	8	3		1		1	1
	形容詞	14	2				1	
	文	14	2		2			
	副詞	21			2			
3字	名詞	67	43	186	63	30	9	2
	動詞	47	9	11	67		48	167
	形容詞	20	2	35	16		39	7
	文	30	15	1	8		10	1
	介詞							
4字	名詞	1	2	14		9		
	動詞				1			3
	形容詞	1			1		1	1
	文	5			4		1	1
5字	名詞			2		2		
	動詞							2
	形容詞							
	文	6			1			

6 字	名詞			1				
	動詞	3		2	2		1	4
	文	2	2	1	1			6
7 字	動詞				1			2
	文	1						
8 字	動詞				1			
	文		1		1			
9 字	動詞							
	文			1	1			
10 字	動詞							
	文							
11 字	動詞							
	文							
12 字	動詞							
	文	1						

〔表3-2〕『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧（巻2）

		巻2						
		賓友	通用	干求	患難	疎慢	徳芸	盟約
1 字	名詞							
	動詞							
	形容詞							
2 字	名詞		3					
	動詞	7	10	3		1	2	
	形容詞		2					
	文							
	副詞		8					
	接統詞		3					

3 字	名詞	19	25	2	3	1	16		1
	動詞	380	265	105	8	22	54	27	5
	形容詞	9	51	4	9	8	8	3	
	文	25	27	8	1	7	7		
	副詞	2	2	2					
4 字	介詞								
	名詞	3	5						
	動詞	17	15	2	1		1	2	
	形容詞	2	1			1			
5 字	文		2	1	2		1	2	1
	名詞								
	動詞	1	1					3	
	形容詞								
6 字	文								
	名詞			3					
	動詞	11	3		1				
	形容詞		2						
7 字	文	1					1		
	動詞		2					1	
8 字	文		1						
	動詞								
9 字	文	1	1			1		1	
	動詞								
10 字	文								
	動詞								
11 字	文								
	動詞								
12 字	文								
	動詞								

[表3-3] 『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧（巻3）

		巻3							
		筵宴	祭祀	慶弔	寄贈	婚姻	官府	器用	読書
1字	名詞 動詞 形容詞							6	
2字	名詞 動詞 形容詞 文 副詞 接統詞	11 4 1	 2	 3	 4	14 11	5	539 24	 6
3字	名詞 動詞 形容詞 文 副詞 介詞	36 183 36 18 1	22 28	20 72 9 1	 42 1	2 9	59 91 18 5	132 30 1	69 193 11 17
4字	名詞 動詞 形容詞 文	 18 6 4	1 1	1 4 3 4	 6	4 3	 3	2 1	 9
5字	名詞 動詞 形容詞 文	 1 2		1 1	 1			1	1 1
6字	名詞 動詞 形容詞 文	 10 2	 4	 2	1		8 2	1 1	1 10 2

7 字	動詞 文	1			1				1
8 字	動詞 文	2							1
9 字	動詞 文	3				1			
10 字	動詞 文	2			1				1
11 字	動詞 文						2		
12 字	動詞 文				1				

〔表 3-4〕『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧（巻4）

		巻 4								
		製作	数量	諸物	財産	兵法	疾病	医療	船件	居室
1 字	名詞 動詞 形容詞						2	2	1 2	4
2 字	名詞 動詞 形容詞 文 副詞 接続詞	3	2		2	64 25	145 46 6 3	4 11	154 57	104 15 5
3 字	名詞 動詞 形容詞 文 副詞 介詞	36 269 23 3	113 56 64 8	48 39 24 1	20 124 11 10	6 22 3 2	34 52 10 18	18 32 4	42 45 4	48 49 5 1

4 字	名詞					1			2	
	動詞	3		1	1	3	1	1	3	1
	形容詞		3	1	1					
	文					1	9	1	1	
5 字	名詞									
	動詞								1	
	形容詞									
	文						1		2	
6 字	名詞							1		
	動詞				3	1		4	2	
	形容詞									
	文	3		2	1	1		2	1	3
7 字	動詞									
	文							1		
8 字	動詞									
	文					1	2			2
9 字	動詞									
	文							1		1
10 字	動詞	1								
	文									
11 字	動詞									
	文									
12 字	動詞									
	文							1		

[表3-5] 『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧（巻5）

		卷 5								
		菜蔬	飯肉	煮煎	魚鼈	蟲類	畜獸	禽類	樹竹	花卉
1 字	名詞	2	2		2			6		
	動詞		10							
	形容詞		7							

2 字	名詞	109	144	1	103	51	54	95	54	38
	動詞		5	3				1		13
	形容詞		3							
	文									3
	副詞 接統詞									
3 字	名詞	57	61	5	30	12	5	16	16	91
	動詞		30	40		1	1	3		
	形容詞			7						3
	文		1				1	4		
	副詞 介詞									
4 字	名詞	3				1		1		1
	動詞			2						
	形容詞									
	文									
5 字	名詞									
	動詞			1						
	形容詞									
	文									
6 字	名詞	3								
	動詞			3						
	形容詞									
	文									
7 字	動詞									
	文									
8 字	動詞									
	文									
9 字	動詞									
	文		1	1						

唐話辞書収録語彙の一側面－『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて－

10 字	動詞 文	1								
11 字	動詞 文									
12 字	動詞 文									

[表3-6] 『南山俗語考』見出し語の字数別・内部構成別分布一覧（巻5）

		巻5			
		菓蓂	種芸	衣服	馬鞍
1 字	名詞			5	1
	動詞			5	3
	形容詞				1
2 字	名詞	44		83	31
	動詞	1		6	11
	形容詞				4
	文				2
	副詞				
	接続詞				
3 字	名詞	16	5	69	12
	動詞	1	26	47	3
	形容詞		1	2	2
	文		2	1	
	副詞				
	介詞				
4 字	名詞			3	2
	動詞				
	形容詞				
	文				

これらの表から3字の単語・フレーズの中では、動詞・動詞フレーズがかなり高い比率を占めていることがわかるが、部門によって傾向の差も読み取れよう。次に挙げる[表4]は、字数別の区分をはずして集計した結果をまとめたものである。

[表4-1] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧(巻1)

	巻1						
	天文	地理	人品	身体	親族	性情	動作
名詞	179	133	349	189	144	15	2
動詞	58	12	13	73		50	178
形容詞	35	4	35	17		41	8
文	59	20	3	18		11	8
副詞	21						
介詞							
接続詞							

[表4-2] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧(巻2)

	巻2							
	賓友	通用	干求	患難	疎慢	徳芸	盟約	遊眺
名詞	22	33	5	3	1	16		1
動詞	417	298	110	10	24	57	34	5
形容詞	11	56	4	9	9	8	3	
文	27	29	9	3	7	9	2	1
副詞	2	10	2					
介詞								
接続詞		3						

[表4-3] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧(巻3)

	巻3							
	筵宴	祭祀	慶弔	寄贈	婚姻	官府	器用	読書
名詞	47	23	21		20	64	680	70
動詞	215	35	80	56	24	102	56	221

唐話辞書収録語彙の一側面－『唐話纂要』と『南山俗語考』の見出し語の比較を通じて－

形容詞	43		12			18		11
文	35		7	2		9	2	22
副詞	1							
介詞			1					
接続詞								

[表 4-4] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧 (巻 4)

	巻 4								
	製作	数量	諸物	財産	兵法	疾病	医療	船件	居室
名詞	36	113	48	22	71	181	25	199	156
動詞	276	56	40	130	51	99	48	110	65
形容詞	23	69	25	12	3	16			10
文	6	8	3	11	5	43	10	8	7
副詞									
介詞									
接続詞									

[表 4-5] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧 (巻 5)

	巻 5								
	菜蔬	飯肉	煮煎	魚鼈	蟲類	畜獸	禽類	樹竹	花卉
名詞	174	207	6	135	64	59	118	70	130
動詞	1	45	49		1	1	4		13
形容詞		10	7						3
文		2	1			1	4		3
副詞									
介詞									
接続詞									

[表 4-6] 『南山俗語考』見出し語の内部構成別一覧(巻6)

	巻5			
	菓蓏	種芸	衣服	馬鞍
名詞	60	5	160	46
動詞	2	26	58	17
形容詞		1	2	7
文		2	1	2
副詞				
介詞				
接統詞				

調査結果をふまえ、以下のようにまとめておく。

- ・見出し語は、部門ごとの出現傾向から、名詞・名詞フレーズ優勢型と、動詞・動詞フレーズ優勢型に二分できる。
- ・見出し語の字数のばらつきは、動詞・動詞フレーズ優勢型においてみられる。
興味深いことに、[表3]と注9に注記した項目とを参照して再度検証すると、次の点を付け加えることができる。
- ・名詞・名詞フレーズ優勢型は、概ね『南山考講記』の分野別配列を踏襲した箇所に一致し、また『唐話纂要』の分野別の項目と重なる部分も多い。

動詞・動詞フレーズ優勢型は、『南山考講記』の段階では分野や場面別に区分されることなく、列挙されるにとどまっていたが、刊本『南山俗語考』となるに当たって、全ての見出し語が、ジャンル別に配置されることとなった。従来の部門分けでは対応しきれない多様な部門名称が新たに創出されて使用されていることが、これを裏付けてもいる。とりわけ、動詞・動詞フレーズを大量に収録する「視聴動作坐立趨走出入去来類」、「賓友往来逢迎尋訪類」の名称は目を引くが、該当する動詞や動詞フレーズを即座に検索するためには、画引き・いろは引き辞書より、部門別配列は有利に働く。また、「通用言語」という部門名が加わったことは、専門分野の語句と一般語句とを区分する意識の反映と解することも可能である¹⁰⁾。

3 動詞フレーズの検証

『唐話纂要』の前半(「○字話」の部分)には、『南山俗語考』に匹敵するほどかなり高い比率で、動詞・動詞フレーズが見出し語となって収録されている。単独の動詞はむしろまれであり、目的語や補語をとまうもの、否定詞つきのもの、重ね型をとるものなど、実に多様な

形式がみられる。ここでは、『唐話纂要』の「三字話」中の動詞・動詞フレーズと、『南山俗語考』の3字動詞・動詞フレーズの多様性を比較したい。

比較対象は次の二者である。

『唐話纂要』の「三字話」中の動詞・動詞フレーズ：378

『南山俗語考』巻2の「賓友類」中の3字動詞・動詞フレーズ：380

「三字話」のみを比較対象としたのは、『南山俗語考』内で多用される3字動詞・動詞フレーズとの違いを検証するためであり、また『南山俗語考』の数ある部門の中から「賓友類」を取りあげる理由は、『唐話纂要』中の語数と、たまたま近似しており、対比が容易であるからにすぎない。

[表5]は動詞フレーズを、①動目型、②結果補語型、③可能補語型、④方向補語型、⑤助動詞型、⑥状語＋動詞型、⑦重ね型、⑧兼語型、⑨否定詞をとまなうタイプに分けて、2資料における出現比率を挙げたものである¹¹⁾。

[表5] 動詞フレーズ内の分布状況

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
『唐話纂要』「三字話」	26.9%	3.2%	6.9%	3.7%	8.5%	5.5%	1.8%	2.6%	8.2%
『南山俗語考』「賓友類」	28.4%	5.3%	5.0%	12.6%	5.0%	7.7%	1.3%	5.3%	6.6%

2つの資料に共通した顕著な特徴として、①の動目型の頻度の高さがまず目につく。さらにつけ加えると、「2音節動詞＋1音節名詞（人称代名詞など）」が安定した形式としていずれにも多く収録されている。④の方向補語の頻度には大きな格差がみられる。「～上来」、「～過去」など個別の補語について、動詞との共起関係や出現比率の調査は、3字のフレーズに限らず、多字のフレーズを対象として継続する必要がある。なお、⑧の兼語型の出現比率が『南山俗語考』「賓友類」で高いのは、部門が「賓友類」であったゆえに、他者に何かを命じたり依頼する際に用いる兼語型が多数収録されたゆえといえよう。

「賓友類」以外の他部門での動詞フレーズの多様性と出現傾向の把握が必要であることはいうまでもない。例えば、「通用類」の3字動詞フレーズは、⑦重ね型（「動詞＋一＋動詞」）を大量に収録しており、際立った特徴となっている。この表には反映されていないが、『南山俗語考』「賓友類」は、「失陪阿」、「少送哩」、「齐到麼」のように文末の語気助詞をとまなう「見出し語」を含み、全体の1.8%を占める¹²⁾。これは『唐話纂要』「三字話」には見られない特徴で、より口語性の強いフレーズを「見出し語」にとりあげていることがわかる。

『南山俗語考』は、部門別に分けた辞書ではあるが、会話の一部を場面別に配置したとみなす

ほうが、実態を反映した捉え方ではあろう。

さて、対象を3字フレーズにしぼった今回の調査結果から、若干の差異はあるものの、2資料のある程度近似した傾向を指摘できよう。補語の類繁な出現は、口語としての特徴を存分に示すものである。2字の動詞・動詞フレーズ、4字の動詞フレーズなどの分布状況や、「文」と認定された「見出し語」内での動詞フレーズの多様な状況の把握は、今後の調査に委ねたい。もちろん、比率から見出せる傾向の指摘だけではなく、個別の動詞・助動詞の有無、共起成分の差異、類義語内での使い分けなどの調査も欠くことができない。今回の調査からはずした形容詞フレーズの類も含め、『唐話纂要』、『南山俗語考』全般を対象とした調査の継続が不可欠である。また調査範囲を、「長短話」、「長短雑話」や「小曲」にまで拡大させる必要もあろう。

4 部門別配列部分にみられる特徴

部門別配列部分の検討に移る。『唐話纂要』巻5は部門別に名詞を中心とした単語が列挙されているが、対応する部門名のある『南山俗語考』の語彙の収録状況と比較しておきたい。全部門の対比ではなく、特徴のある「親族類」、「器用類」の2類をとりあげる。

下の〔表6〕は、2資料の2部門における「見出し語」数と、2資料のいずれにも収録された「見出し語」数を示す。つまり、「見出し語」として一致した語数を示すものである¹³⁾。

〔表6〕2部門における語彙の収録状況

	『唐話纂要』	『南山俗語考』	一致する語数	『南山俗語考』別部門内での収録語数
「親族類」	108	144	84	なし
「器用類」	432	738	215	24

「親族類」は『唐話纂要』、『南山俗語考』のいずれも名詞のみを収録した部門である。『唐話纂要』の「見出し語」の77.8%を『南山俗語考』が収めており、踏襲した可能性が高いと考えられる。

一方、「器用類」は2資料ともに語数が突出して多い部門であるが、内実はかなり異なっている。『南山俗語考』「器用類」は名詞だけでなく、動詞・動詞フレーズや文をも「見出し語」とするのに対し、『唐話纂要』は2音節の名詞を中心に、名詞・名詞フレーズのみを収録する。語の一致度は低く、『唐話纂要』の49.7%のみが『南山俗語考』と一致するにとどまる。大幅な増補がおこなわれた結果であろう。しかし、「血漕的刀」、「竹絲的硯匣」という特異な「見出し語」を『南山俗語考』も収めており、『唐話纂要』の「器用類」を下敷きにし

て改編作業がおこなわれたことを裏付けてもいる。

さらに興味深い点は、『唐話纂要』では「器用類」に配列されていた語彙のうち、24語が、『南山俗語考』の他部門内に収録されていることである。24の内訳は、「兵法類」9、「居室類」3、「衣服類」・「禽類類」・「船件類」各2、「製作類」・「数量類」・「花卉類」・「馬鞍類」・「地理類」・「飯肉類」各1である。部門の細分化とともに、このような処置となったものと思われる。

次に、稿本とされる『南山考講記』の部門別配列と『南山俗語考』の対応関係をみておこう¹⁴⁾。部門別の見出し語の一致度をマークにより示す。

[表7] 部門別収録部分の対応関係

『唐話纂要』	『南山俗語考』		『南山考講記』
	天文時令類／地理名称類 巻1	△	天文時令地理 巻5
	人品類 巻1	△	人品 巻5
親族 巻5	親族類 巻1	◎	親族 巻5
	身体類 巻1	▲	身体 巻5
器用 巻5	宝貨器用服飾香奩玩具類 巻3	▲	器用 巻5
	兵法軍器類 巻4	○	兵法並軍器 巻6
	疾病瘡瘍類 巻4	△	感動 巻6
	医療類 巻4	△	療用 巻6
	婚姻女工類 巻3	△	婚姻並女工 巻6
	居室坊店類 巻4	△	家居 巻6
畜獸 巻5	畜獸鼠類 巻5	○	獸 巻7
蟲介 巻5	卵生化生湿生蟲類 巻5	○	虫 巻7
禽鳥 巻5	林山水原禽類 巻5	○	飛禽 巻7
龍魚 巻5	魚龜蚌蛤類 巻5	○	魚介 巻7
米穀 巻5	飯肉菜肴茶菓造醸類 巻5	△	飲食 巻7
菜蔬 巻5	菜蔬類 巻5	○	菜蔬 巻7
菓蓴 巻5	菓蓴類 巻5	◎	菓 巻7
	馬鞍具毛色類 巻5	◎	馬具並毛色 巻7
樹竹 巻5	樹竹類 巻5	◎	樹竹 巻7
花艸 巻5	花卉類 巻5	◎	花艸 巻7

船具 巻5	船件具名類 巻4	△	船件 巻6
疋頭 巻5	衣服布帛紡織采類 巻5	○	衣服並疋頭絲綿花様 巻7

[表7]への注：表内の○△▲のマークは、各部門内部での『南山考講記』と『南山俗語考』の語彙の一致の度合いを示す。

- 完全に一致
 △ 10語以上の変更あり
 ○ 数語の入れ替えがあるがほぼ一致
 ▲ 大幅な変更あり

この表から、『南山考講記』をほぼそのまま踏襲した部門と、大きく改編した部門に分かれることが読みとれ、後者は、名詞・名詞フレーズだけでなく多様な形式の「見出し語」を有する傾向があることも2章に挙げたデータから明らかである。ついでながら『南山俗語考』で増補された語彙は、『南山考講記』の巻1～巻4内の部門別のない語彙群から、適宜選択のうえ再配置されたものがほとんどである。

換言すると、『南山考講記』の巻1～4は、動詞フレーズを中心とした多様な語彙がジャンル分けをせずに列挙され、『唐話纂要』のような文字数による区分もなされてはいなかった。巻5～7までの部門別では名詞・名詞フレーズを中心とする収録傾向があり、これは『唐話纂要』部門別配列内の「見出し語」の特徴とも重なり、『唐話纂要』「○字話」内においては、動詞フレーズをはじめとして多様な形式が見られたことも通じるのである。加えて、上の表に載せる部門名称のシンプルさから、『唐話纂要』と『南山考講記』の近似性を読みとることができる。

このように稿本段階では『唐話纂要』に近い側面を多分に残していたものが、刊本『南山俗語考』となるに至って、付録「長短雑話」を除く全ての語彙が、いずれかの部門に帰属させられる。2章ですでに指摘した通り、動詞フレーズや文も何らかの部門に配置されるため、従来の部門名では包摂しきれず、新たに創出された解説的な名称が多数登場することとなる。

5 まとめ

以上、「見出し語」の調査から、初歩的な分析を試みた。さらなる比較対象として、唐通事養成教本の直系資料があり、語彙の体系的な把握と比較は重要な課題となる。また、『清俗紀聞』収録の語彙との対照作業も大きな示唆を与えてくれよう。

〈注〉

- 1 『南山考講記』の異本については、拙稿（2000）、（2001）を参照されたい。『南山考講記』、『南山俗語考』の収録語彙の異同については、不十分ながら、拙稿（1989）で指摘している。
 なお『南山俗語考』には数系統の刊本があり、2巻の「遊眺登覧類」を欠くものがあるが、本稿は欠葉のない玉里文庫本による。刊本の系統差については、石崎（1926）pp.239-241、拙稿（1998）を参照されたい。
- 2 喜多田（1997）、（1998）、（1999）、木津（2000）参照。
- 3 奥村（2002）参照。
- 4 鳥居（1962）参照。
- 5 このほか、国語学の立場から訳文の日本語部分の検証や、見出し語の日本語語彙としての定着を検証した論考が発表されている。荒尾（1982）、薬科（1984）、福田（1989）参照。
- 6 教本類の書名が一致するとしても、その内容が長崎唐話学で使用されたものと一致するとは断言できない。なお石崎（1926）は、薩摩藩で使用された通事養成教本のうち、「二字話」、「三字話」、「長短話」、「要緊話」、「請客人」、「苦惱子」等は薩摩藩が独自に刊行したとの説があると指摘している。また、当時石崎が肝属郡の薩摩藩旧唐通事の家を来訪しており、手澤本の『唐話纂要』、『瓊浦』等の所蔵を確認したという。影響の多寡についての判断は保留せざるを得ないが、薩摩藩の通事養成が長崎唐話学の影響下にあったことは否定できない。
- 7 巻5の魚龍蚌蛤類にある「乙曰示：イワシ」、「戛子魚：カツヲ」も音訳語であるが、後者は『唐話纂要』巻5の龍魚類にも収められている。
- 8 本筋の議論からははずれるが、見出し語の多様性について若干補足しておく。岡田（1991）「森島中良と辞書編纂の方法」（pp.77-134）は森島中良による蘭日辞典『類聚紅毛語訳』の編纂過程を詳細に分析しており、単語でなくフレーズや文が見出し語となる編纂方法を残している点を批判して、「辞書編纂意識の前近代性を物語り」、「日蘭辞典としての正純性を妨げる」とする（p.105）。しかし、森島は唐話学にも手をそめ、中国俗語読解のための辞典として当時知られていた『俗語解』の改編を試みてもいることから、唐話学の系列に属する広義の辞書の体裁にも親しんでいたことは事実である。「語」という最小限の単位の認定作業を怠ったと非難することはたやすいが、前近代性というレッテルを貼るだけではなく、森島の蘭日辞典編纂の背後にあった唐話学への関心という面から再度見直す必要がある。なお、岡田（1991）の指摘にもあるが、森島改編による『俗語解』の引用書目中には、『俗語解』底本にはなかった『南山考講記』が新たに追加されている（原文は『南山公講記』と誤る）。直接的な影響関係を云々することは控えるが、流布する範囲が刊本よりはるかに制限された写本を、参考書の一つとして森島が利用していたことはもっと注目されてよからう。
- 9 『南山俗語考』の部門別の項目名は以下の通り。表内や本文表内で言及する際は、概ね、下線で示した略称を用いる。なお以下の論述の参考のために、『唐話纂要』の部門別項目と対応関係があるものには項目名の前に◆を付す。また稿本と目される『南山考講記』の部門別項目との関連性が見出せるものには◇を付す。詳細は4章の[表7]を参照されたい。

第一巻天部	◇天文時令類
地部	◇地理名称類
人部	◇人品類／◇身体類／◆◇親族類／性情類／視聽動作坐立趨走出入去来類
第二巻人部	賓友往来逢迎尋訪類／通用言語類／干求請託類／患難類／疎慢欺哄驕奢類
	徳芸類／盟約敬戒類／遊眺登覧類
第三巻人部	筵宴飲饌類／祭祀寺廟類／慶弔死生類／寄贈拝謝類／◇婚姻女工類
	／官府政刑獄
器財部	◆◇宝貨器用服飾香奩玩具類
文学部	讀書寫文字類
第四巻营造部	製作破壊断折膠粘燥湿類／数量多少長短厚薄類／諸物形状類

産業部	財産有無算計帳簿類
兵部	◇兵法軍器類
疾病部	◇疾病瘡瘍類／◇医療類
船部	◆◇船件具名類
居処部	◇居室坊店類
第五卷食物部	◆◇菜蔬類／◆◇飯肉菜肴茶菓造醸類／煮煎焼炒類
鱗介部	◆◇魚鼈蚌蛤類
昆蟲部	◆◇卵生化生湿生蟲類
走獸部	◆◇畜獸鼠類
飛禽部	◆◇林山水原禽類
草木部	◆◇樹竹類／◆◇花卉類／◆◇菓蔬類／種芸類
衣飾部	◆衣服布帛紡織采類
馬匹鞍轡部	◇馬鞍具毛色類

- 10 唐話辞書の系列の中では、『雑字類編』（天明6（1786）年初刊）が、「言語」という部門名を使用している。「通用言語」という部門名の採用が、『南山俗語考』独自のものか、先例となる唐話資料が存在したのかについては、未調査である。ついでながら、『雑字類編』は、中津藩藩主奥平昌高によって刊行された日蘭辞書『蘭語訳撰』（文化7（1810））の編纂過程においても多くの影響を与えたとの指摘がある（松村・鈴木（1968））。奥平昌高は、島津重豪の第二子であり、重豪自身も蘭癖大名として知られる。現在、鹿児島大学図書館玉里文庫に所蔵される『蘭語伊呂波引』は、松村・鈴木（1968）によれば『蘭語訳撰』に先行する辞書で、語彙の取捨選択と増補がおこなわれて、『蘭語訳撰』の成立に至ったとされる。また『蘭語伊呂波引』にも『雑字類編』の影響が色濃く残るという。重豪の直接的関与を示唆するものではないが、島津藩にあって、蘭語学と唐話学が近接した領域であった可能性を示す。

なお、『蘭語訳撰』より14年早く刊行された日蘭辞書である『蛮語箋』が、『蘭語訳撰』の成立に大きな役割を果たしたとの指摘もなされている。『蛮語箋』は注8で言及した森島中良による『類聚紅毛語訳』の改訂版である。蘭語学と唐話学の両方に通じた人材が辞書の成立に関与していたことを示す一例である。

- 11 ①～⑨の認定にあたっては次の基準によって算出した。

- ①動目型には、「動詞＋了＋目的語」、「動詞＋目的語＋了」、「動詞＋着＋目的語」などが含まれる。
- ③可能補語型は、肯定型・否定型を合算した出現比率を示す。否定型（「動詞＋不＋補語」）を⑨とはみなさない。
- ④方向補語型は単純方向補語と複合方向補語の両方を含み、「拿煙来」のように目的語をはさんだ文型も含んでいる（「拿煙来」を「「拿煙＋来」のように連動式とする分析もありうるが、補語型として処理する）。「再過去」、「且回去」のように副詞を状語として備えているものは、⑥の状語＋動詞型としても重複して算入している。
- ⑤助動詞型は否定詞「不」をとともうもの、例えば「不要去」を含んでおり、これらは⑨としては数えない。
- ⑦重ね型には「動詞＋一＋動詞」、「動詞＋動詞＋兒」、「去＋動詞＋動詞」、「動詞＋動詞＋看」、「動詞＋動詞＋目的語」というタイプがあるが、最後のものは、①動目型としても算入している。
- ⑨否定詞をとともうタイプは、「不」、「没」、「未」、「未曾」が動詞を後続させるものに限定する。

- 12 ここでは語末に現れる「了」を含んでいない。

- 13 ここでの一致とは、「見出し語」としての厳密な一致を指す。何らかの修飾語が付されたものは不一致とみなす。例えば「祖父」と「祖父翁」は一致とはしない。なお、和訳やカナ音表記に異同があったとしても「見出し語」としては一致とみなす。

14 『南山考講記』の巻の配置は題箋により決定できるものと不明のものがあるが、ここでは長澤本に従う。

〈参考文献一覧〉

- 荒尾禎秀 (1982) 「唐話辞書の語彙」『講座 日本語学 5』(明治書院) pp.258-278
- 岩本真理 (1989) 「『南山俗語考』のことば」『鹿児島経済大学論集』30-1 pp.81-107
- 岩本真理 (1998) 「現存する『南山俗語考』数種について」『人文研究』50-8 pp.1-13
- 岩本真理 (2000) 「筑波大学蔵『南山考講記』について(1)」『人文研究』52-4 pp.1-12
- 岩本真理 (2001) 「筑波大学蔵『南山考講記』について(2)」『人文研究』53-4 pp.19-31
- 岡田袈裟男 (1991) 『江戸の翻訳空間 蘭語・唐話語彙の表出機構』笠間叢書244(笠間書院)
- 奥村佳代子 (1996) 「岡嶋冠山『唐話纂要』考」『関西大学 中国文学会紀要』17 pp.19-31
- 奥村佳代子 (1997) 「『唐話纂要』編纂の意図」『中国語学』244 pp.104-113
- 奥村佳代子 (2000) 「近世唐話学における多様性——「唐話」形成の一つの手がかりとして——」『或問』1 pp.69-89
- 奥村佳代子 (2001) 「『唐話纂要』の言葉——岡嶋冠山の伝えた「唐話」その1」『或問』2 pp.31-46
- 奥村佳代子 (2002) 「『忠臣蔵演義』と『海外奇談』」『中国語研究』44 pp.64-80
- 神林裕子 (1997) 「江戸時代における中国近世語の受容——留守希斎撰『語録訳義』を通じて」『中国研究集刊』来号 pp.90-136
- 喜多田久仁彦 (1996) 「唐通事の教本《養兒子》(1)」『研究論叢』47 pp.188-199
- 喜多田久仁彦 (1997) 「唐通事の教本《養兒子》(2)」『研究論叢』49 pp.254-266
- 喜多田久仁彦 (1998) 「唐通事の教本《養兒子》(3)」『研究論叢』51 pp.278-292
- 木津祐子 (2000) 「『唐通事心得』訳注稿」『京都大学文学部紀要』39 pp.1-50
- 杉本つとむ (2000) 『洋学資料文庫① 蛮語箋』(皓星社)
- 鳥居久靖 (1962) 「明治期における中国俗語辞書について——近世日本中国語学史稿之三——」『天理大学学報』38 pp.65-79
- 福田益和 (1989) 「岡嶋冠山編『唐話纂要』本文覚え書き」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』(桜楓社) pp.511-531
- 松村明・鈴木博 (1968) 『蘭語訳撰』複製本(臨川書店)
- 武藤長平 (1926) 『西南文運史論』(岡書院)
- 藁科勝之 (1981) 『雑事類編—影印・研究・索引—』(ひたく書房)
- 藁科勝之 (1984) 「唐話辞書とその国語語彙——岡嶋冠山の作品を中心として——」『文経論叢』19-3 pp.113-142
- 藁科勝之 (1978) 「『清俗紀聞』漢語索引(上)」『国語学 研究と資料』2 pp.1-36
- 藁科勝之 (1979) 「『清俗紀聞』漢語索引(下)」『国語学 研究と資料』3 pp.1-31